

『しぐれ』物語の展開 —蓬左文庫本系統を軸として—

末松 美咲

キーワード 『しぐれ』 室町物語 改作 絵巻 奈良絵本

はじめに

物語文学の流れのなかで、同じ主題を持つ物語が王朝物語から中世王朝物語へと至り、室町の公家物語へと趣向を変えながら変貌することは、夙に論じられてきた。例えば百本以上の伝本を数える『住吉物語』は、同じ筋立てを持ちながら改作が重ねられ、諸本間において王朝物語から中世的な物語への展開を見せている(注一)。王朝物語である『しのびね』の影響を受け成立した『し

ぐれ』物語も、室町物語として比較的多くの伝本が伝わり、版本ともなつて長く人々に愛された物語のひとつである。とりわけ永正十年の奥書を持つ彩色絵巻(永正絵巻)から、他の諸本への展開は大きく、伝本間において「王朝物語的なものから室町物語的なものへの質的な変容」があることが指摘されている(注二)。

この『しぐれ』伝本のうち、蓬左文庫蔵奈良絵本・東洋文庫蔵

奈良絵本の系統は、永正絵巻発見以前には流布本から大きく隔たる特異な本文と位置付けられていた(注三)。しかしながら、近年永正絵巻の研究が進むなかで、伝本間の過渡期的な特徴を示すものとして、その位置付けを再考することが求められている(注四)。そこで本稿では、蓬左文庫本系統の本文を基軸として、『しぐれ』物語の展開を具体的に捉え、蓬左文庫本の特徴と諸本における位置付けについて改めて考えたい。

一、『しぐれ』物語について

まず、『しぐれ』物語の概要について述べる。ここでは、物語内容と諸本について説明したうえで、先行研究において諸本間の関係がどのようにまとめられてきたのかを確認する。

一、一、『しぐれ』概要

『しぐれ』物語は、大臣家の男君と、親に死に別れた美しい女君との悲恋を描く公家物語である。梗概は次のとおりである。

左大臣には男女二人の子供がいた。男君である中将は、病を得て清水寺に参籠している妹君を訪ねた際、にわかには降り出した時雨に行きあぐねる女君を見かけ、傘を貸した。中将は美しい女君の様子に心を奪われ懸想する。しかし、清水寺の別当もこの女君に懸想し、女君の乳母に語らって女君を奪う計画を立てる。このことを聞いた乳母子の侍従は、女君に別当の計画を伝え、女君を伴って隣の局へと避難する。そこは中将の妹君の籠る局であった。中将はこれを仏の利生と喜んで、女君を父大臣邸に連れ帰り、二人はともに暮らすようになる。このような中、中将の父大臣は左大将家の姫君との縁談を取り決める。中将は気の進まない様子であったが、両親から強ちに責められ、左大将家の姫君と結婚することとなった。ところが、左大将家の姫君との結婚後も、中将の心は女君にあり、姫君のもとには一向に居つかない。この様子を見た左大将の北の方は、陰陽師を呼び中将に呪詛をかけた。この呪詛によって中将は女君のことを忘れ、茫洋とした気分で左大将家に留まった。女君は中将の帰ってこないことを嘆き、侍従のおばである丹後の内侍を頼んで、大臣家をひっそりと去り、内侍の局に入った。宮中では、帝が内侍の局にいる女君に興味を持ち、女君は帝の寵愛を受ける。しかし、女君は中将のことが忘れられ

ず、宮中でその気配を感じるのも苦しいほどである。そのような折、中将の妹君が女御として入内するが、帝は女君にばかり心を奪われ、何かにつけて優遇する様子であった。女君もついには覚悟し、女御として承香殿に入る。一方中将は、帝に呼ばれて参内した際、腰のあたりに入れられたまじないの形代を発見する。それにより呪詛が解け、女君のことを思い出すが、大臣邸にはすでに女君の姿はなかった。中将は、承香殿の女御が女君ではないかと思ひ至り、確認に向かうと、まさにその人であった。出家を決意した中将は侍従に別れの挨拶を伝え、横川に上り髪を下ろした。中将の出家を知った女君は悲しみ、皇子や姫宮が誕生し栄華を極めても、なおも中将を想い心が満たされることはなかった。

この『しぐれ』のように、「相愛となった男女が何らかの障害によって離れた後、女君は帝に寵愛され栄華を極め、男君は出家する」という型は、王朝物語である『しのびね』と類似し、「しのびね型」と呼ばれる。『しのびね』は、もとは平安時代末期に成立していた物語である。現在は散逸し、鎌倉時代以降に改作した作品が伝わっている。『しのびね』を代表とする「しのびね」型の物語は鎌倉時代から室町時代に流行し、『むぐら』『あさぎり』など多くの「しのびね型」作品が生み出された。『しぐれ』も、一連の「しのびね型」の擬古物語群の中に位置付けられる。また『しぐれ』は鎌倉時代の散逸物語である「恋に身かふる」を改作したものであることが指摘されており（注五）、王朝物語の

系譜を引く作品であると言える。

『しぐれ』の現存伝本の数は多く、松本隆信氏は「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」において三十本近い伝本を挙げている（注六）。その後も国内外から新たな伝本が発見されているが、『しぐれ』の諸本を考察するうえでとりわけ重要なのが永正絵巻（個人蔵）の発見であろう（注七）。永正絵巻発見以前は、永正十七年の奥書を持つ写本（永正写本）が最古の写本とされ、代表的な本文として扱われてきた。永正絵巻は、この永正写本から更に七年遡る永正十年の奥書を持つ。またこの絵巻の奥書には「永正第十八月十七日之を書く／行年二十八歳拙女」とあり、書写年月日とともに二十八歳の女性が書写したことが分かる。『しぐれ』物語の享受を示す重要な伝本である。

本稿では先行研究に倣い、大東急記念文庫蔵写本（永正写本）に代表される本文を持つ伝本群をA、天理図書館蔵写本および竜門文庫蔵写本に代表される本文を持つ伝本群をB（以下まとめてB類本とする）、蓬左文庫蔵奈良絵本（蓬左文庫本）系統をCとして分類し、新たにD類として永正絵巻を加えた。

A類 (イ) 大東急記念文庫蔵永正十年写本一冊

(ロ) 学習院大学蔵写本一冊（室町末）

(ハ) 多和文庫蔵写本一冊（江戸初期）

B類 I 天理図書館蔵寛永十四年写本一冊

II (イ) 竜門文庫蔵元和三年写本一冊

享保六年藤谷小左衛門刊絵入本五巻

(ロ) 正保慶安刊絵入本三巻

大東急記念文庫蔵奈良絵巻五軸（江戸前期）

(ハ) 寛文十一年鱗形屋刊絵入本三巻

天和四年鱗形屋刊絵入本三巻

(ニ) 享保十三年近江屋九兵衛刊絵入本二巻

C類 蓬左文庫蔵奈良絵本五冊（江戸前期）

東洋文庫蔵奈良絵本二冊（江戸前期）

D類 個人蔵永正十年絵巻三巻

ここでは代表的な伝本を取り上げたが、このほか、国内外において多くの奈良絵本の存在が確認されている。国内では日本文学研究センター蔵奈良絵本、奈良教育大学図書館蔵奈良絵本、個人蔵屏風（元奈良絵本）の存在が報告されている。また国外では、フランス国立図書館、パリ・チュエルヌスキ美術館、アイルランド・チェスタービーティ図書館にそれぞれ江戸時代前期作と考えられる奈良絵本が所蔵されている。ここに挙げた奈良絵本の多くはB類系統であり、江戸時代以降の絵入り版本と奈良絵本の関係を考えるうえでも興味深い事例となる。

このようにB類系統には多くの伝本が存在するが、C類系統は現在のところ蓬左文庫本、東洋文庫本の二本しか見つかっていない。A類やB類の二種に比べ本文も特徴的であるなど、特異な系統である。

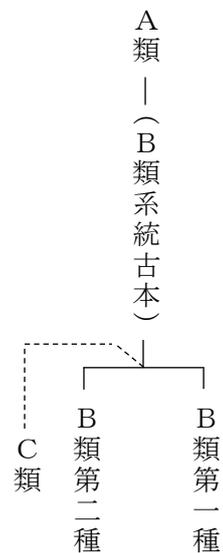
一・二、先行研究における諸本の位置づけ

『しぐれ』物語の諸本関係については、早く松本隆信氏によってまとめられたが、その後永正絵巻が発見されたことにより、近年松本氏の論が見直されてきている。本節では、松本氏の分類とその後の研究の展開について述べる。

先述したように、松本隆信氏は「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」において、『しぐれ』物語の三十本近い伝本を挙げ、A類・B類・C類に分類している。さらにその後、これらの本文を詳細に検討し、その後関係論じた(注八)。ここでは、書写年代や和歌の数、物語内容の整合性などから、永正写本を含むA類本が最も古態を残す伝本として位置付けられている。さらにB類本の二種とC類諸本を比較し、A類本をもとにB類系統の古本が派生し、そこからB類本の二系統がそれぞれに成立したとする。またC類本については、和歌の数が少ないことからB類本に属するものとして位置付けた上で、B類本に比べ増補が見られること、B類本の二種と文章が大幅に離れていることなどを示し、C類本は「極めて特徴のある異本であるが、その伝本の性質、数からいっても、さして古い本文とは思われない。恐らくB類第一・二種本のいずれかを抛り所として、全く新たに本文を作成したものである」と論じている(注九)。

松本氏の示した諸本関係図を本稿の論旨に沿ってまとめると、次のように示すことができる。なお、括弧内は現存しないが存在

したことが想定される伝本を表している。



この松本隆信氏による諸本分類の後、永正絵巻が発見され、若杉準二氏を中心とする絵詞研究会により研究が進められてきた(注一〇)。そのなかで金光桂子氏は、永正絵巻を仮にDとし、改めて永正絵巻を含めた諸本関係について論じている(注一一)。金光氏は、主にA類本である永正写本とDとして位置付けた永正絵巻を比較し、A本に対してD本は古風な文体を残すこと、D本では心情描写を丹念に描くなど王朝文学に近い描写がなされていることから、D本が王朝物語的であるのに対し、A本はより室町物語的であることを指摘している。ここでは、松本氏によって最古本として位置付けられたA本よりも、D本の方が古い物語の形を残していることが示唆されている。

さらに金光氏は、B・C類をA・D本と合わせて比較することによって、D本からA本へと細かな本文の展開が見られることを述べ、B・C類はその過程での過渡期的な形を留めた、A類よりも一つ前段階の本文であろうことを指摘している。D類本を含め

改めて諸本の展開を示すと、次のようになる。

D類 — B・C類 — A類

ここでは単純化して示したが、諸本の前後関係は勿論こうした直線的な関係とは考えられず、複雑に分岐しながら展開しているものと考えられる。特に物語中の和歌に関しては、B・C類の和歌はA類よりも二十首以上も少ないため、B・C類が和歌を省略しているものとして、A類の方がより古態を留めているものと考えられる（注一二）。この和歌の問題は、DからB・C類を経てA類へと直線的に成立したのではないことを示している。また安達敬子氏によって、A本にD本よりも古い本文を有する箇所があることも指摘されており（注一三）、基本的な筋書きは保持されたまま、それぞれに展開を遂げていったことがうかがえる。

このように、先行研究においては、A類もしくはD本が古態を留めた本文を有しており、B・C類はいずれか古い本文から展開した先に成立したものであると位置付けられている。とりわけ蓬左文庫本が属するC類に焦点を絞れば、松本氏はC類が諸本のうちでも最も後の形であることを指摘している。しかしながら、D本を含め改めて諸本を照らし合わせてみると、松本氏によってC類に独自の増補だと考えられていた本文が、古態を残すD本と共

通する箇所として確認できるのである。

そこで次に、蓬左文庫本の本文を諸本と比較検討することによって、C類の位置付けを再検討したい。

二、物語構成の展開

C類の位置付けを再検討するにあたり、D本である永正絵巻から、他の諸本へと至るなかで、物語としてどのような展開があったのかをまずは確認したい。D類に対しA類では、文章表現や登場人物の心情などが簡略化される傾向にあること、筋書きが単純化されていることがこれまでに指摘されている（注一四）。ここでは、筋書きの単純化という点について、その方法を詳しく確認してゆく。

二・一、筋書きの簡略化

次頁に挙げた【諸本構成対応表】は、『しぐれ』の冒頭から、中将の縁談話を持ち上がる場面までの構成をまとめたものである（注一五）。A・B・C類については、構成に大きな違いはないが、D類本と比べると、細かい記事の移動が随所にみられる。とりわけ、場面が大臣邸に移ってから（表17〜44）の入れ替えは激しい。

『しぐれ』物語の展開

【諸本構成対応表】×は該当記事がないこと、▲は前出、▼は後出を示す。

	D 類本	C 類本	B 類本	A 類本
1	左大臣家の紹介	左大臣家の紹介	左大臣家の紹介	左大臣家の紹介
2	妹君の清水寺参籠	妹君の清水寺参籠	妹君の清水寺参籠	妹君の清水寺参籠
3	時雨降る中での出会い	時雨降る中での出会い	時雨降る中での出会い	時雨降る中での出会い
4	中将の懸想	× (別当の懸想)	中将の懸想	中将の懸想
5	中将、隣の局を垣間見する	×	中将、隣の局を垣間見す	中将、隣の局を垣間見す
6	中将文を遣るが女君拒否	中将文を遣るが女君拒否	中将文を遣るが女君拒否	中将文を遣るが女君拒否
7	妹君と女君の局の様子	×	×	×
8	女君の素性	▼	×	×
9	別当と乳母の相談	別当と乳母の相談 (女君の素性)	別当と乳母の相談	別当と乳母の相談
10	計画を娘に語る乳母	計画を娘に語る乳母	計画を娘に語る乳母	計画を娘に語る乳母
11	母と姉の退出した際に姫君を助ける侍従	母と姉の退出した際に姫君を助ける侍従	母と姉の退出した際に姫君を助ける侍従	母と姉の退出した際に姫君を助ける侍従
12	侍従、隣の局に助けを求める	侍従、隣の局に助けを求める	侍従、隣の局に助けを求める	侍従、隣の局に助けを求める
13	中将、姫君を匿い、捜しにきた乳母らを追い返す	中将、姫君を匿い、捜しにきた乳母らを追い返す	中将、姫君を匿い、捜しにきた乳母らを追い返す	中将、姫君を匿い、捜しにきた乳母らを追い返す
14	別当に報告する乳母	別当に報告する乳母	×	×
15	別当、姫君を捜そうとするが叶わず	別当、姫君を捜そうとするが叶わず	別当、姫君を捜そうとするが叶わず	別当、姫君を捜そうとするが叶わず
16	▼	乳母ら帰京	乳母ら帰京	乳母ら帰京
17	中将、女君を連れて清水を出る	中将、女君を連れて清水を出る	中将、女君を連れて清水を出る	中将、女君を連れて清水を出る
18	父邸に到着し、女君とともに臥す	父邸に到着し、女君とともに臥す	父邸に到着し、女君とともに臥す	父邸に到着し、女君とともに臥す
19	▼	中将と姫君、手水を使う	中将と姫君、手水を使う	中将と姫君、手水を使う
20	▼	琴をめぐるやりとり	琴をめぐるやりとり	琴をめぐるやりとり
21	中将を呼ぶ父大臣	×	×	×
22	中将と姫君、手水を使う	▲	▲	▲
23	中将、両親に妹君のことを報告	中将、両親に妹君のことを報告	中将、両親に妹君のことを報告	中将、両親に妹君のことを報告
24	左大将の姫君との結婚を勧める	▼	▼	▼
25	乳母と中将のやりとり (おといを召す)	▼	▼	▼
26	母君に問われ報告する乳母	×	×	×
27	中将と侍従のやりとり (女君の素性、別当の件)	中将と侍従のやりとり (女君の素性)	中将と侍従のやりとり (女君の素性)	中将と侍従のやりとり (女君の素性)
28	▲	中将、乳母を呼びおといを召す	中将、乳母を呼びおといを召す	中将、乳母を呼びおといを召す
29	▼	姫君の美しさに感激する乳母	姫君の美しさに感激する乳母	姫君の美しさに感激する乳母
30	▼	母君に女君のことを報告する乳母	×	×
31	おといを参らせる	おといを参らせる	おといを参らせる	おといを参らせる
32	姫君の美しさに感激する乳母	▲	▲	▲
33	妹君とのやりとり	×	×	×
34	中将、姫君と歌のやりとり	×	×	×
35	×	清水での文のこと	×	×
36	母君に女君のことを報告する乳母	▲	×	×
37	×	降雪の折、縁談を決める父大臣と大将	雨宿りの折、縁談を決める父大臣と大将	雨宿りの折、縁談を決める父大臣と右大臣
38	×	父大臣と母君のやりとり	父大臣と母君のやりとり	父大臣と母君のやりとり
39	中将に縁談について告げる父大臣	中将に縁談について告げる父大臣	中将に縁談について告げる父大臣	中将に縁談について告げる父大臣
40	女君のもとに戻る・琴について	▲	▲	▲
41	乳母ら帰京	▲	▲	▲
42	父大臣の立腹・母君とのやりとり	×	×	×
43	母君に強要され、文を書く中将	母君に強要され、文を書く中将	母君に強要され、文を書く中将	母君に強要され、文を書く中将
44	女君に縁談について打ち明ける・嘆く二人	女君に縁談について打ち明ける・嘆く二人	女君に縁談について打ち明ける・嘆く二人	女君に縁談について打ち明ける・嘆く二人

永正絵巻では、中将が女君を父大臣邸に連れ帰った後、女君と中将だけでなく、父大臣、母君、中将の乳母とのやりとりなど、場面が複雑に切り替わる。これに対し他本は、同一登場人物の順番をできるだけひとつにまとめ、物語の筋を単純化している。例えば永正絵巻では、女君と中将が父大臣邸で戯れている場面（表40）の後に、女君の乳母の帰京が語られている（表41）。そして、そのすぐ後に再度父大臣邸でのやりとりに移っている（表42）。一方で、A本からC本では女君の乳母の帰京を別当との一件の最後に位置付けている（表16）。これは、それまでの別当と乳母の企みの流れの中に乳母の帰京をまとめることによって、物語の筋を整理しているのだと考えられよう。

こうした筋を明確にしようとする意識は、この表において他にも見られる。永正絵巻は、女君と中将の交流を随所に挿入している（表22・40）が、他本では中将が女君を大臣邸に連れ帰ってきた直後にまとめている（表19・20）。中将の乳母と、その娘で姫君の身の回りの世話をするおといに関する記述も同様である。永正絵巻では、中将の乳母やおといの登場は段階的に語られる（表25・26・31・32）のに対し、AとC本ではその記述を一か所にまとめている（表28と31）。これもやはり、物語の展開を簡略にしようとする意識の表れであろう。

さらに興味深いことは、AとB類の本文が、永正絵巻にはない場面をあらたに創出している点である。それは、中将に左大将家

の姫君との縁談話が持ち上がる展開の中で見られる。

永正絵巻においては、中将が清水寺から女君を連れ帰ってきた直後に、すでに左大将家の姫君との縁談が持ち上がった（表24）が、中将はそれを紛らわしながら女君と過ごしていた。そして女君と過ごす中で次第に縁談の話が進んでゆき、最終的には母君に強要されて、左大将家の姫君宛てに文を書くことになるのである（表43）。一方AとC本では、中将の縁談話へと物語が展開するに際して、父大臣と左大将が縁談を取り決めるという場面が挿入されているのである（表37）。ここでは、出仕した父大臣が帰る折、空模様が悪く帰りあぐねていると、左大将がやってきて縁談の話を持ち掛けるという、永正絵巻では全く見られない場面が挿入されている。そして父大臣が帰ってくると、すぐさま中将を呼んで縁談の話を告げ、左大将の姫君に文を書かせるのである（表38と43）。

このように、物語内で伏線を張りつつ徐々に話が膨らんでいく永正絵巻に比べ、簡略化されたAとD本では、次々に物語が展開していく。しかし、その構成を見ると、①姫君の乳母のたくらみ②大臣邸に逃れた中将と姫君の生活③姫君の世話のため、中将の乳母とおといが参上④中将に持ち上がる縁談と、分かりやすく物語が展開していることが分かる。

この傾向は物語全体を通して確認でき、永正絵巻においては入り組んでいる物語中盤の大臣邸や内裏における場面展開も、Aと

C本では記事を入れ替えることによって、視点が頻繁に切り替わらないよう筋を単純化しているのである。

二・二、段階的な展開―蓬左文庫本系統の位置づけ

さて、ここまでは物語の構成改編の傾向を検討するため、永正絵巻との比較にAとC類本を一括して扱ってきたが、次に、C類本である蓬左文庫本を軸として、C類本独自の記事に着目したい。それにより、C類本がB類本よりもさらに前段階の構成を示しており、そこに構成改編の意識が残っていることを確認する。

金光氏は先の論文のなかで、B類本とC類本に、A類本には見られない女君と中将の妹君の交流の場面があることを取り上げ、D類本には女君と妹君との交流が細やかに描かれていることから、これは他の諸本が人間関係や心理描写を簡略化するに当たって妹君との交流場面を切り捨てていくなかで、その一部だけが残ったものとの見解を示している。そして、B類・C類が過渡的な形を残していることを指摘した(注一六)。

この妹君との交流と同じように、過渡的な形を示す箇所が他にも見られる。特に、C類本において、永正絵巻発見以前は独自の増補だと思われていた本文が、むしろ古い形を残していたと分かったのである。ここでは、女君に對面した中将の乳母が、母君に女君のことを報告する場面を取り上げる(前掲表30)。この場面は、A類本およびB類本には見られない。しかし、位置は異なる

が、永正絵巻には存在しているのである(前掲表36)。これはやはり、物語が簡略化されるに従って切り捨てられていった描写が、C類には残っていることを示しているのだろう。永正絵巻には、次のようにある(注一七)。

播磨の乳母、母上に申すやう、「中将殿の御方におはする人は、まめやかに比ひなく美しう見え給へ。傍ら光る心地ぞし給へる。よも今は余の心地もあらじ。ありがたくまぼられ給ふ。多くの人を見侍れども、かかる人をこそ見侍らね」と申せば、「心苦しきことかな。昨日も大将殿に会ひて十一月十六日と定められけるを。殿も良きことに思はれたれば、良しとは世に聞こえじ」と嘆き給ふ。(永正絵巻)

ここでは、中将の乳母が女君のすばらしさを母君に報告しているが、母君は大将家の姫君との縁談を気にして、女君については「心苦しき」と述べる。これに對して、蓬左文庫本には次のようにある(注一八)。

さて乳母大臣殿へ参り、北の御方に申やう、「中将殿まれ人をこそ見参らせ侍り。御かたち世に優れ、なのめならずにいづくしく此世の人とも思えず。あまりに類少なくわたらせ給ふほどに、一時ばかりまほり参らせて、御前を立去りかねたるなん」と申ければ、北の御方は「中将いつとなく心あこがれて眺めがちにて侍りつると、いとよき事にやなん」とぞおほせける。(蓬左文庫本)

蓬左文庫本では、女君について報告する中将の乳母に、母君は「いとよき事にやなん」と返している。これは永正絵巻とは全く異なる反応であるが、前節で述べたように、蓬左文庫本においては、この時点ではまだ大将家の姫君との縁談話は持ち上がったおらず、中将は独り身なのである。よって母君が女君の存在を嘆く理由はないため、母君の反応を変えたのであろう。蓬左文庫本で記事の位置を入れ替え、時系列を整えたために起こった独自の改編であり、ここには構成を意識的に改編しようとする痕跡がうかがえる。

また前掲表35において、蓬左文庫本には、女君と中将が清水寺での文についてやりとりをする場面がある。

かくて中将殿、姫君の御髪を遣りて寄り添ひ、「さて清水にて御文を参らせつるに、御手も触れずして捨てさせおはせませし事、あまり御情けなかりし」との給へば、侍従聞きて、「いざとよ、我は知り奉らず」と申ければ、「女房みなみな立ち出でし後にやなん。これと知りせば別当へ入れ参らせまじきものをなん」と戯れさせ給へば、姫君もなん聞き侍るらん、「いなや何の浮き事ぞや」とて寄りふし給へば、侍従心に思ふやう、「あはれおもふままなる御中かな。これを親と姉に見せ参らす事なりせば、いかに喜び給ひなんや」とぞ思ひける。(蓬左文庫本)

この場面は、C類本にのみ見られるものであるが、永正絵巻では、

同じ位置に中将が女君とはじめて歌のやりとりをする場面がある(表34)。そこでは蓬左文庫本のような清水での文の話は出てこないが、記事の位置が近い点や、歌のやりとりに関する話をしていいる点などから、これもやはり古い形の名残であると考えてよいだろう。とりわけ永正絵巻では、大臣邸での生活において中将と女君との仲睦まじい戯れが度々描かれているが、A類本やB類本ではそうした中将と女君の交流のほとんどが切り捨てられている。蓬左文庫本のこの二人の交流の記事は、物語がさらに梗概化していく前段階の構成を示すものである。

以上見てきたように、D本である永正絵巻から他の諸本へと至る段階で、意識的な構成の改変が確認できた。その改編の方法は、頻繁に視点が切り替わる永正絵巻の記事を入れ替え、より分かりやすい筋になるよう簡略化するというものであった。さらにその段階を示すものとして、蓬左文庫本には永正絵巻の名残と考えられる場面があることを指摘した。これにより、C類はB類よりも一段階古い本文を残していると言うことができよう。

三、本文表現の展開

前節で検討したように、複雑な場面構成を持つ永正絵巻から他の諸本への展開のなかで、物語場面が恣意的に入れ替えられ、筋書きが単純化されていることが確認できた。さらに、蓬左文庫本

は簡略化された構成を持つ本文のなかでも比較的多くの場面を有しており、永正絵巻から他本へと至る過渡期的な構成を持つものであることが明らかとなった。

それでは、物語の構成だけでなく、本文表現の上からも同じことが言えるのだろうか。次に、物語本文の展開について確認したい。

蓬左文庫本は、永正写本やB類本に比べ、会話文によって物語が展開していく箇所が多い。次に挙げる場面は、女君に懸想した清水寺の別当が、女君の乳母に語らい、女君を奪う計画を立てる場面である。

さる程に別当はかくと見るよりその面影忘れがたく、さらぬ体にて局のあたりを休らひて、人も出でよかしと目をつけて見るところに、女房四五人連れて出でければ、喜びて、その中におとなしき女房を傍らへ呼び寄せて申けるは、「いづくより御参りぞ」と問ひければ、乳母申やう、「これは過ぎにし頃、三條の中納言きんさねと申せし人の御娘にておはします、いかなる御事にや、父母一度に隠れ給ひて、その後わらはが育くみばかりにて、今まで育ててまいらせ候」と申ければ、別当、「あないたはしや、中納言殿にも恐れながら少し親しくはんべる物を。さてはそれにておはしますか。さらばこなたへ入らせ給へ」とて、傍らなる座敷へ呼び入れて、種々の肴をととのへ、酒をすすめて、唐綾の小袖一重とりい

だして、乳母にとらせて申やう、「さても中納言殿わたらせ給ふほどは、つねに三條へも参りつるに、かくならせ給ひて後は、御行方をも聞かまほしくははんべれども、いつも隙なき身にて今まで過まいらせはんべり。嬉しくもただ今見あひ申ものかな。さて姫君は御門へまいり給ふか」と申ければ、乳母、「父母ましまさばこそまたけ／＼しく親しき方もわたらせ給はず。誰もてはやし御宮仕ひなどもはんべるべき」と申ければ、別当、「いたはしや。さてはいつとなくながめがちにておはしますべき。心苦しきよ。何かは苦しかるべき。わが宿所へ入れまいらせ給へかし。乳母をはじめて十人わたらせ給ふとも、ゆめゆめをろかにはなんど」と、やや細々と申ければ、乳母心に思ふやう、中納言殿にもゆかり有人なれば、何か苦しかるべき。さらばと思ひて、「わが身はかくと思ひ申せとも、若き者どもに申あはせ、やがて案内申さんと細々と契りて出でにけり。
(蓬左文庫本)

この長文で描写される別当と乳母とのやりとりに対し、永正写本では、非常に簡潔な記述がなされている(注一九)。

さるほどに、清水の別当、此姫君を見たてまつりて、乳母にとりより、さまざまに申けり。
(永正写本)

記述の分量が大きく異なるが、次に挙げる永正絵巻の本文と比較すると、蓬左文庫本は簡潔な本文を増補したのではなく、古い形から展開したものだということが明らかである。

さて、この姫君は、左衛門督の一人持ち給ひて、もてかしづき、「我が位高くなりなば、必ず内へ参らせん」などおぼし給ひしほどに、この君十ばかりのほどにて、父失せ給ふ。幼き御心に悲しうおぼすに、またうち続き、母上隠れさせ給ひぬ。一方ならぬ思ひに、もろともに死なれぬ身を恨みて、「様をも変へばや」とおぼせど、乳母制し聞こゆれば、心ならで年月をはかなく過ぎ給ひにけり。

さて、この清水の別当、この乳母を年頃知りたる上、物詣でに見奉りて、いかにせんと思ひ詫びて、この乳母によるづ心を尽くし申すやう、「この姫君、我に盗ませ給へ。命のあらん限りは、いかにもいかにも扱ひ聞こえん。そこにも思ふ様にあらせん」など、やうやうに責めければ、乳母思ふやう、「父母もおはせぬ人なれば、いみじき御扱ひもあらんや。法師といふばかりこそあれ、若く見目よく、品も貴なる人の筋にてあるなり」など思ひて、「げに我もありよかり」など思ひ、「さも」と契る。
(永正絵巻)

永正絵巻を並べてみると、蓬左文庫本の別当と乳母の長い会話文は、永正絵巻に近いものだということがわかる。蓬左文庫本は、直前にあった姫君の素性を語る文を、別当とのやりとりの中で会話として取り入れており、会話文を通じて物語が展開している。また蓬左文庫本には、この後乳母が二人の娘に語らう中で、永正絵巻の傍線部と類似した「法師と申御身いかとばかりなり。品

も気高く抗えぬにておはずぞかし」という言葉も見え、永正絵巻の本文の名残があると考えられよう。

一方で、先に示したように、永正写本およびB類本においては別当の描写が省略され、別当はほとんど人格を持たない存在になっている。このような人物描写の省略は永正写本に著しい。蓬左文庫本と比較しても、侍従や内侍の描写が削られるなど、より中心的な人物たちに物語を焦点化し、梗概化していく傾向がみえる。このような展開は、この後に続く場面でも特徴的に見られるものである。次の本文は、清水寺の別当と姫君の乳母がついに計画を執行する夜、乳母が出かけた隙を見計らい、侍従が女君に計画を打ち明ける場面である。

この僧都は、美しかりつる御ありさまのみ忙しくおぼえければ、日の暮るるも心もとなく思ふほどに、僧都の、「物言はん」と言はせければ、心得て、「侍従は御前に候ひ給へ。誰も同じことなれば、仏の御前へ参らん」とて、二人は出でぬ。

侍従は「嬉しき隙かな」と思ひて、「申さんにつけていかばかりおぼし召さんと、心憂く侍りつれども、御心得候はざらんも無下に口惜しく侍れば、かかることの候ふは、いかがさせ給ふべき。親のことをかく申せば、そら恐ろしく侍れど」と言ふを聞き給ふ御心、ものも覚え給はず。
(永正絵巻)

ここでの侍従の台詞には、女君にありのまま告げることの心苦しさを、親のことを告げ口する恐ろしさなどが語られており、侍従

の揺れる胸の内が表現されている。この場面は、蓬左文庫本では、次のような表現となっている。

さて別当は、今宵かならずと言ひ定め、暮るるを待ちかね、いつかりし面影さらに身をたち離れず、人の申事も耳にも入らず、うつつ心もなく迎へとるべき心のみ待ちかねてい給ひける。さて乳母、少納言は「今日はことさら仏の御前にて御祈祷申さんと思ふなり。侍従は御伽申せ」とていらへける有様、慌ただしきほどなり。侍従はふといかなる事かあらんと心苦しくて、「申かねながら、あまりに御いたはしく思ひま

いらせて、親の事をかやうに申あげ候へば、仏も憎くおぼすらんと恐ろしく候へども、かうかうの事を謀り申なり。さこそは口惜しくおぼしめさんと申かねんべれとも、むげに口惜しく候へば」とて、つぶつぶと語り申をきこしめし、心の内せんかたなく、ただ今こふするわさもおぼしめしたる御有様、御いたはしさとへんかたなし。(蓬左文庫本)

蓬左文庫本は、永正絵巻とほぼ同じ展開を見せている。傍線部の侍従の台詞も、仏を持ち出すところは中世的ではあるが、親に憚りながら告げ口をするという心の内が引き継がれている。これに対し、永正写本ではそうした細やかな心情は描かれない。

思ひわづらふほどに、やうやう日も暮れゆけば、母と少納言とは、姫君盗ませに別当のもとゑ行にけり。侍従は御伽に候むべしとて行かざりけり。侍従、つくづくと思ひ続ける

に、つゐに隠れなるまじと思ひて、「母と姉とは姫君を別当に盗ませに行きつるなり。いかがせん」とぞ申けり。

(永正写本)

永正写本の侍従の台詞は、親と女君双方に対しての葛藤が切り捨てられ、ただ事態を告げる端的な口調へと変化している。またそれ以前の別当の描写などもなく、より梗概的な本文になっていると言ふことができるだろう。換言すれば、蓬左文庫本は、永正絵巻に見られる細かなやりとりの痕跡を留めているということである。

永正絵巻が、王朝文学に倣い細やかな心情表現を描いていることは先学の指摘する通りである(注二〇)。こうした登場人物たちの心情表現は、現存本において最も梗概的な本文である永正写本へと展開していくなかで、大きく省略されていく。先に挙げた侍従の台詞からも、その傾向は見て取れる。一方で、蓬左文庫本には、独自の方法で永正絵巻の心情表現を引き継いでいる箇所も見られる。例えば、中将が父大臣の陥穽にはまり、左大将家に留められる場面である。

六の進参りて申やう、「『これに御とどまり候て、御年も召され候へ』とおほせ候て、牛飼、雑色、御供の人々みな帰り申て、一人も候はず。ただわたくしばかり候」と申ければ、中将涙をはらはらと流し給ひて、「だしぬかれぬ」と思し召し、胸うち騒ぎ、涙に暮れ給ひて、明るるまで大床に立

ちあかし給ひて、つくづくと案ずるに、「末の露本の雫や、いなづまよりもほだなき浮き世にいつまで命永らへて、かかる物を思ふらん。世のうちとこそ契りしに、さこそは待たせ給ふらん。いたはしや」とせんかたなくぞ思し召しける。

(蓬左文庫本)

傍線部では、父大臣に謀られ置き去りにされた中将が、姫君のもとに帰ることができないつらい心情を述べている。これは、永正絵巻の当該場面における中将の心情の名残であろう。

中将は出なんとし給へど、人々みな帰りぬ。晝例の尋ね給ふに、「大臣殿の『今はおぼろけには御出あるまじ。みな帰れ』とありつる」とて人なし。六位といふぞや御用やとて候ひける。「さばかり心にかけ給へば、いかなること、この君思ふ給ふらん。我ある時だに、さてみたるもいみじう傍ら痛げに思ひたるに」と思ひ続け給ふに、涙も留まらず。「我こそかくてあらめ、文だに遣らばや」とおぼして、わりなき隙に書きて、六位の進に遣はす。つくづくとうち眺めておぼし続くるに、「浅ましや。何事もこの人のためにこそ世もあらまほしけれ。よしなきことを思ふことよ」とそぞろに恨めしくおぼせども……

(永正絵巻)

蓬左文庫本に見られる「末の露本の雫」という表現は、『新古今集』にもとられる僧正遍正の「末の露本の雫や世の中の後れ先立つたためしなるらん(注二一)」をもとに中世広まった語で、『平

家物語』や『太平記』などにも見える。室町物語にも散見されるが、蓬左本ではそうした類型表現を用いて、より室町物語的な表現に変化していると言えるだろう(注二二)。このように和文調から中世の流行表現への変化は見られるものの、永正絵巻に描かれる中将の心情を残そうとする意識が確認できる。一方で、永正写本においては、蓬左文庫本の傍線部がない。これはB類本も同様である。

六位の進まいりて申けるは、「『これに御とどまり候へ。御年をも是にて越させ給へ』とて、御供の人々も、輿車、皆々帰り、誰も候はず」と申せば、中将殿、涙をはらはらと流して、「だしぬかれたり」に思へば、胸の内いとど苦しくて、そのまま大床に立ちあかし給へり。(永正写本)

直前までの本文表現は類似しているが、中将の心情部分がきれいに切り落とされているのである。こうした箇所は他にも見られる。A類・B類ではここで挙げたような心情表現を切り捨て、より梗概化の道を辿っていくのである。このように見てくると、王朝物語的な本文から、梗概的・筋書的な本文へと、段階的に改変されていく過程が看取できよう。その中で、蓬左文庫本は古い形を留めつつ、新たな表現へと転換していく過渡期的な本文として位置付けられるのである。

結論

以上、蓬左文庫本を基軸として、C類本について改めて検討し、諸本の展開のなかに位置付けてきた。

まず、永正絵巻と他の諸本の構成が異なることを示し、物語内で伏線を張りながら複雑に展開していく永正絵巻に対し、他本は記事を入れ替えることによって内容を単純化し、物語の筋を分かりやすくしていることを示した。その途中で、蓬左文庫本に見られる独自の記事は、永正絵巻の名残であることを指摘し、C類本がB類本に先立つ形を残していることを述べた。

次に、本文表現に着目し、蓬左文庫本では永正絵巻の登場人物たちの会話や心情表現などの描写を引き継ぎながら、中世的な表現へと変化していることを指摘し、そうした表現がB類本やA類本では切り捨てられ、より梗概化されていく傾向にあることを指摘した。

これらのことから、王朝物語的な本文から室町物語的な本文への展開には、いくつかの段階が踏まれていることがうかがえる。『しぐれ』においては、まず物語の筋が整えられ簡略化し、本文表現も中世的になっていったと考えられる。C類本では、登場人物たちのやりとりや心情表現などは簡略化されながらも物語の流れの中に組み込んでいたが、B本・A本においては細かな表現が切り捨てられ、さらに梗概化の方向に進んでいったと考えること

ができるだろう。

ただし、今回は取り上げることができなかったが、和歌をめぐる改編や、C類本に見られる独特の表現など、多くの課題が残っている。はじめに述べたように、和歌についてはA類本よりもB・C類本が少なく、全ての段を通して、C類本がA類本よりも古い形を残しているわけではないことが分かる。また、C類本では独自の長歌が挿入されており（注二三）、古い形を留めつつ、独自の方向に展開していったとも考えられるのである。

いずれにせよ、蓬左文庫本系統の本文は、現在二本の奈良絵本でしか伝わっておらず、古い伝本も存在していないが、その内容は版本として流布したB類本系統よりも古い形が残されていることを指摘できるだろう。一方で、より簡略化された本文が、版本や奈良絵本となって流布していったことも、物語の形態と享受者の観点から考えていきたい問題である。とりわけ梗概化された物語は、版本となって大衆に受け入れられやすかったと考えられる。絵入り本の位置付けと合わせて、挿絵を含めた検討も必要であろう。これらのことを今後の課題として、本稿を閉じたい。

注

- (一) 小林健二・菊地仁・徳田和夫『真銅本「住吉物語」の研究』(笠間書院、一九九六)など。
- (二) 金光桂子「『しぐれ』諸本と永正絵巻」(『時雨物語絵巻の研究』臨川書店、二〇一六)。
- (三) 松本隆信「擬古物語系統の室町時代物語―「しぐれ」―若

- 草」「桜の中将」「志賀物語」外―」（『斯道文庫論集』四、一九六五）。
- （四）前掲注（二）論文。
- （五）中野莊次「風葉和歌集考（下）」（『国語国文』三一三、一九三三年）。
- （六）奈良絵本国際研究会議編『御伽草子の世界』（三省堂、一九八二）。
- （七）徳田和夫「お伽草子『しぐれ』永正絵巻の紹介と翻刻」（『魅力の奈良絵本・絵巻』三弥井書店、二〇〇六）。
- （八）前掲注（三）論文。この論文では和歌の数により伝本をA類・B類のふたつに分類し、B類をさらに三種に分けている。ここではC類はB類第三種として分類されているが、近年の研究成果や今回検討した内容を踏まえ、本稿ではC類として扱うこととする。
- （九）前掲注（三）論文。
- （一〇）絵詞研究会『時雨物語絵巻の研究』（臨川書店、二〇一六）。
- （一一）前掲注（二）論文。
- （一二）前掲注（二）論文。
- （一三）安達敬子「『しぐれ』と『しのびね』物語―永正絵巻『時雨もの語』を中心に―」（前掲注（二〇）所収）。
- （一四）前掲注（二）論文など。
- （一五）この表については、前掲注（二〇）所収の諸本対応表も参考にしながら、私に場面を取り上げ制作した。
- （一六）前掲注（二）論文。
- （一七）永正絵巻の本文引用は、前掲注（一〇）の積文に拠る。
- （一八）蓬左文庫本の本文引用については、稿者が翻刻を行ったものを用いた。その際、私に句読点を付し、適宜漢字に改めた。
- （一九）永正写本の本文引用は、『室町時代物語大成』第六卷所収「しぐれ（大東急記念文庫蔵永正写本）」に拠る。
- （二〇）前掲注（二）、前掲注（一二）、新間水緒「『時雨物語』と清水寺」（前掲注（一〇）所収）など。
- （二一）新日本古典文学大系『新古今和歌集』（岩波書店、一九九二）。
- （二二）金光氏は、前掲注（二）論文のなかで、中將が女君を清水寺から連れ出す際の本文表現において、永正絵巻の和文調から、永正写本の本文は中世の道行文の文体になっていることを指摘している。
- （二三）この長歌については、松本隆信氏が前掲注（三）のなか

で、他本の系統の和歌に基づいて増補したものであり、「若草」「桜の中将」「志賀物語」の同様の場面にも同じ長歌が挿入されていることから、これらの物語との交渉が指摘されている。

Abstract

Deployment of the “Tale of Shigure”: With a focus on books of the Hōsabunko type

SUEMATSU, Misaki

Keywords: Tale of Shigure, Muromachi tale, adaptations, picture scroll, picture book

This paper discusses the text development in the “Tale of Shigure.” By focusing on the Hōsabunko books, in particular, I explain the specific transformation from dynasty story texts to Muromachi story texts.

“Shigure” is a Muromachi tale that was influenced by “Shinobine,” a medieval dynasty tale. Although more than 30 editions exist, four main edition types can be distinguished. The first comprises picture scrolls with a postscript of Eisho 10 (Group D); the second is a group of manuscripts with a postscript of Eisho 17 (Group A); the third is a group of Tenri Library manuscripts (Group B); and the fourth is the Hōsabunko book type (Group C). Of these editions, Group C is positioned as a peculiar text that was significantly different from the popular editions. However, as research on “Shigure” has progressed in recent years, it is necessary to reconsider its position as a text displaying transitional characteristics between editions.

In this paper, first, by examining the four types of text, I show that the composition of the Eisho scrolls and other editions is different. Whereas the Eisho scrolls have a complicated story structure, the other books simplify the content by replacing the articles and making the storyline easier to understand. I also point out that the original articles found in the Hōsabunko type are remnants of Eisho scrolls and state that a form of C-type text preceded the B-type text.

In addition, I focus on textual expressions. In the Hōsabunko books, the characters’ expressions in the Eisho scrolls become medieval expressions, although they inherit conversational and emotional expressions. In the A type and B type, such expressions are truncated and produce only an outline as a story.

Based on these facts, I explain the process whereby the story gradually changes from the D-type dynasty story text to the abridged outline texts of other books. In addition, I point out that the Hōsabunko type is positioned as a transitional text in which the old form is retained and changed to a new expression.